

1. 科研費ニュース

令和7(2025)年度 東京未来大学の科研費採択状況(表1)とテーマ(表2)は以下のとおりです。令和3年(2020)年度から今年度(2025)までの5年間の採択状況の推移(図1)をみると、若手研究や挑戦的研究(萌芽)の採択件数の減少が目立ちます。また昨年度につづいて満期を迎えた研究が重なり、端境期を迎えて採択件数も減少していますが、以後、新規採択が増えることを期待しています。

表1 令和7(2025)年度 科研費採択状況

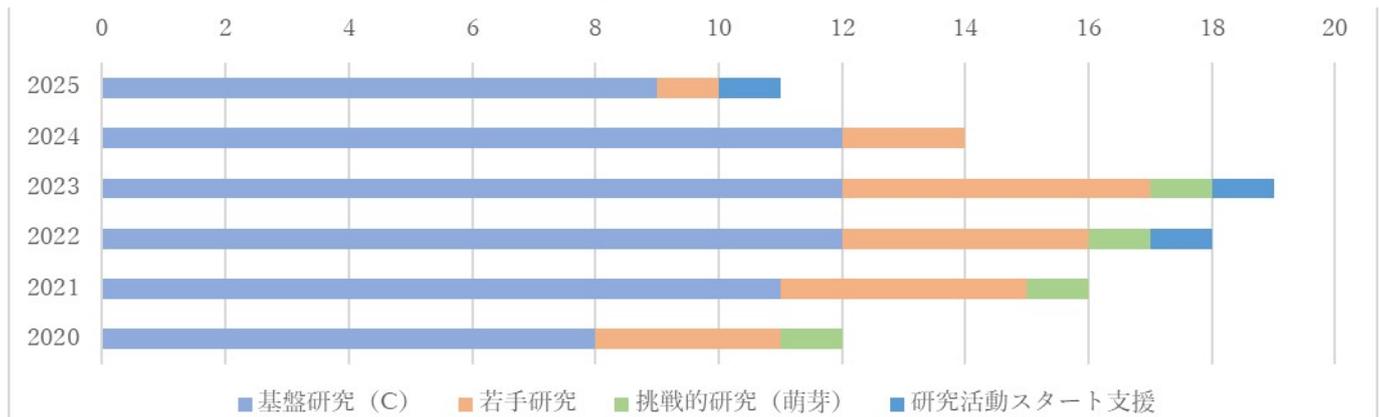
	件数	金額(円)	備考
基盤研究(C)	9	32,760,000	新規1件, 令和3(2021)年度以降継続8件
若手研究	1	4,810,000	令和5(2023)年度以降継続1件
研究活動スタート支援	1	910,000	新規1件
	11	38,480,000	

注) 金額は直接経費

表2 令和7(2025)年度 科研費採択テーマ一覧 *2025年度新規採択

基盤研究(C)		
		(共同研究者)
高橋 文子	教師教育における「芸術知」の方法論的説明-表象と感性の融合を図るプログラム開発-	
山崎 善弘	姫路藩木綿専売制の実現過程と歴史的意義に関する総体的研究	
金塚 基	高等学校における応援部の活動役割を通じた教育機能の展開及び集団文化の再生産	岩崎 智史
大内 善広	父親の主体的な育児関与への動機づけを促す父親教室の参加経験に関する効果の検討	野澤 義隆
西村 実穂	水害発生時における保育施設利用者の安全確保および保育機能維持に関する研究	
小林 久美	家庭科及び数学科の教科横断的学習に関する実践研究-教材開発および評価を通して-	
中澤 純一	「社会正義の実現」を視点とした移民学習の教材開発と実践	田中 真奈美
小林 寛子	ICTを活用した主体的な学習を促す支援法の開発	磯 友輝子, 埴田 健司
*白石 雅紀	マイノリティの複合と個人内のマイノリティ相克の経験の語りのTEM図による抽出	
若手研究		
橋元 知子	幼稚園の英語イマージョンクラスにおいて幼児の英語発話を促す要因と環境とは	
研究活動スタート支援		
佐藤 亮太郎	中学生における不登校の予備基準の検討	

図1 令和2(2020)年度からの採択状況の推移(件数)



2. 令和7(2025)年度 新規科研費採択者の研究紹介

今年度、科研費を新規で採択された白石雅紀先生の研究テーマと内容をご紹介します。

こども心理学部 白石 雅紀



Q1 採択された研究テーマと概要、具体的研究方法や研究計画について教えてください。

本研究のテーマは、「複合マイノリティ当事者およびマイノリティ相克(IMC)内包者の経験に関する質的研究」です。複数のマイノリティ属性を併せ持つ「複合マイノリティ当事者」、なかでも互いに相容れないマイノリティ性(たとえば同性婚を望む LGBTQ+ムスリムなど)を個人の中に抱える「IMC(Inter-minority Conflict)内包者」に着目し、彼らの経験をインタビュー調査によって収集します。そして、質的分析手法である「複線径路・等至性モデル(TEM)」を用いて図式化・考察を行い、社会的分断の構造や共生の可能性を探っていく国際的にも先駆的な研究です。

本研究の目的は、まず複合マイノリティ当事者の現状と課題を明らかにすること、次に IMC 内包者が抱える内的な相克の経験とその意味を明らかにすること、そして最後に、個人の経験から集団間の葛藤を和らげる手がかりを見つけることです。研究は大きく2つの柱で構成されています。研究Aでは、外国籍の障害者や女性障害者など、複合的な属性を持つ当事者への聞き取り調査を行い、人生経験を振り返っていただきます。その内容を TEM を使って整理し、時間の流れに沿った変化や葛藤の構造を可視化することで、共通する課題や必要な支援のあり方を明らかにします。研究Bでは、IMC 内包者に焦点を当て、マイノリティ集団間の相克関係を整理した「マイノリティ相克表」を更新します。そのうえで、対象者への聞き取りを通じて相克経験を TEM で分析し、政策的・実践的な支援の方向性について検討します。

研究計画としては、1年目に研究会の立ち上げや文献レビュー、調査設計、倫理審査などの準備を進めます。2年目には研究Aに基づいて複合マイノリティ当事者への調査と分析を行い、3年目は研究BとしてIMC内包者への調査と分析を実施します。4年目には成果の統合を図り、国際学会やシンポジウムでの発表、そして学術書の出版に向けた準備を行う予定です。

Q2 研究計画調書作成にあたって、工夫された点などアドバイスをお願いします。

今回の研究計画調書の作成にあたっては、塚本先生をはじめとする異なる分野の複数の先生方にご助言をいただき、それぞれの専門的な知見から貴重なご意見を頂戴できたことが大変ありがたく、非常に有意義だったと思います。研究計画調書の作成にあたって、研究の背景や研究チームの組織図と役割分担、4年間の研究計画の流れといった主要な要素については、図を用いて視覚的にも分かりやすく示すよう工夫しました。さらに、調書全体を通じては、適切な改行や行間の確保など、審査委員の方々にとって読みやすい構成になるよう配慮しました。当初は、文字数を詰め込み、理論的な隙のない調書を目指していましたが、お世話になっている先生から「読みやすさを最優先にすべき」との助言を受け、思い切って文章量を大幅に削減し、審査委員が無理なく読み進められるような構成に改めました。本文のフォントは11ポイントのBIZ UDP 明朝 Medium、見出しはBIZ UDP ゴシックを使用しました。

なお、今回は基盤研究(C)のうち、社会福祉に関する小区分で応募しましたが、調書の中でも「どのような国際性を有するか」という項目は、特にこの小区分において他の課題と差がつく重要なポイントであったと感じています。幸いなことに、これまでの研究活動を通じて国際学会などでの発表の機会を得ており、本研究の国際的な位置づけについて事前に把握することができていました(毎年ご支援いただいている本学の特別研究助成金のおかげです。心より感謝申し上げます)。その成果をもとに、研究計画調書では国際性に関する根拠を明確に示すことができたため、この項目については比較的うまく記述できたのではないかと感じています。

Q3 研究の進捗はいかがですか?今後の展望についてお聞かせください。

先日、本研究に関する倫理審査の承認を頂きました。お忙しい中、丁寧に見ていただきました本学の研究倫理・不正防止委員会の先生方に御礼を申し上げます。今後は、複合的なマイノリティの立場にある当事者への聞き取り調査を本格的に進めていく予定です。前回の科研費は3年間の助成でしたが、今回は4年間の採択をいただくことができました。しかし、4年間といえども決して長い時間ではなく、あっという間に過ぎてしまうものと心に留めています。そのため、一日一日を大切にしながら、着実に研究を進めていきたいと考えています。また、この期間を通じて得られる知見を、学術的な成果にとどまらず、社会に還元できるよう努めてまいります。

3. 令和7（2025）年度 研究助成金（科研費以外）採択者の研究紹介

今年度、公益財団法人橋本財団より福祉助成金（研究助成）を採択された荻野昌秀先生の研究テーマと内容をご紹介します。

こども心理学部 荻野 昌秀



Q 1 採択された研究テーマと概要、具体的研究方法や研究計画について教えてください。

採択された研究テーマは「虐待予防を目的とした階層的ペアレントトレーニング」です。本研究は、地域社会における虐待予防のための多段階的な支援モデルを構築・検証する実践研究です。まず第1層支援としてより多くの保護者の方々がアクセスしやすいよう、オンデマンド動画を制作・配信します。この動画を通して、保護者のストレス軽減や子どもの状況改善への効果を検証していきます。また第2層支援として、発達支援を要する未就学児の保護者の方を対象とした小グループのペアレントトレーニングを実施し、虐待予防も含めた効果を検証します。

Q 2 研究計画調書作成にあたって、工夫された点などアドバイスをお願いします。

研究計画調書を作成するにあたり最も意識したことは、助成機関が掲げる「社会課題の解決」という趣旨でした。現在の社会が抱える課題に対して効果的で具体的な解決策となり得る研究手法を検討することに注力しました。また本研究は実践的なアプローチを重視しているため、地域への実装可能性も意識しました。例えば、少人数の専門職でも実施可能なプログラム設計とすることで、多くの自治体や支援現場で実際に活用できることを目指しています。さらに、先行研究との整合性や、私自身がこれまで取り組んできた研究との関連性も明確に示しました。

Q 3 研究の進捗はいかがですか？今後の展望についてお聞かせください。

研究の進捗は順調です。既に実施予定の自治体からは内諾を得ており、プログラムもほぼ完成しています。概ね予定通りに進行しており、今年の9月以降にはプログラムの実施を開始する予定です。

研究期間やリクルートの制約により、本研究では第1層および第2層支援の開発と検証に重点を置いています。助成終了後にはさらなる展開を見据えています。将来的には、より個別のニーズに対応する第3層支援（個別支援）の開発や、第1層から第3層への移行条件に関する検討を進めていく予定です。これらの研究を通して、支援を必要とする子どもたちとその保護者に対し、より効果的で的確なサポートを提供できるようになると考えております。

編集後記

今年度最初の研究推進ニュースレターをお届けします。今年度の研究推進委員会は、宅間雅哉委員長の下、鈴木公啓委員、田澤と、新たに、小谷博子委員、川口めぐみ委員が加わった5名、そして陪席に福本さん、本宮さんを迎え、計7名で運営しております。

本号の発行にあたり、ご多忙中にも拘らず、ご執筆を引き受けいただきました先生方に、委員一同心より御礼申し上げます。どうぞご味読のほど、よろしくお願い申し上げます。

研究推進委員 田澤佳昭